

群馬大学教育学部海外インターンシップについて

－在外日本人学校および海外協定校での教育実践－

伊藤 隆¹⁾・今井 就 稔²⁾・新井 淑 弘³⁾
任 龍 在⁴⁾・上原 景 子⁵⁾・菅生 千 穂⁶⁾

- 1) 群馬大学教育学部数学教育講座
- 2) 群馬大学教育学部社会科教育講座
- 3) 群馬大学教育学部保健体育教育講座
- 4) 群馬大学教育学部障害児教育講座
- 5) 群馬大学教育学部英語教育講座
- 6) 群馬大学教育学部音楽教育講座

Overseas Internship in Faculty of Education, Gunma University
－Educational Practice at Overseas Japanese Schools and Partner Universities－

Takashi ITOH¹⁾, Narumi IMAI²⁾, Yoshihiro ARAI³⁾,
Yongjae LIM⁴⁾, Keiko UEHARA⁵⁾, Chiho SUGO⁶⁾

- 1) Department of Mathematics Education, Faculty of Education, Gunma University
- 2) Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Gunma University
- 3) Department of Health and Physical Education, Faculty of Education, Gunma University
- 4) Department of Special Needs Education, Faculty of Education, Gunma University
- 5) Department of English Education, Faculty of Education, Gunma University
- 6) Department of Music Education, Faculty of Education, Gunma University

キーワード：日本人学校、海外協定校、インターンシップ、短期研修

Keywords : Overseas Japanese School, Partner University, Internship, Short Practice

(2017年8月31日受理)

1. はじめに

群馬大学教育学部及び教育学研究科の学生の多くは卒業後、群馬県内もしくは国内で教職に就くことを目指しているが、その視点は内向きで、教育の国際化やグローバル化に対し、関心のあまり高くない傾向がある。一方、群馬大学全学の方針として、平成25年群馬大学国際化推進基本計画が次のように打ち出された。『(以下抜粋) 教育は、大学が担う最重要の任務で

ある。本学は、優れた人材を国内外に輩出し、グローバル化時代に活躍できる人材を育成することに努めなければならない。グローバル化時代に活躍できる人材とは、「自国及び他国の文化・歴史・伝統を理解し、外国語によるコミュニケーション能力を持ち、国内外において地球的視野を持って主体的に活動できる人材」である。本学の基本理念には、地球規模のニーズに応えることに加えて、日本及び群馬県で活躍できる人材を育成することも含まれている。群馬県は国内有

数の多文化共生地域であることから、他国の文化・歴史・伝統について理解を深め、幅広い国際的視野を身に付けることが求められる。』とある。

群馬県が国内有数の多文化共生地域であり、益々、外国人のとの交流も増え、学生が教職に就いたのち、外国籍児童、生徒の教育に直接かかわることも増えて行くことが予想される。

群馬大学教育学部国際交流委員会が再発足したのも国際化推進基本政策が出された平成25年であり、教育学部内でもその必要性が高まってきた時期でもある。

本学部学生が、教育実習終了後、前橋市内また近郊の小中学校でインターンシップを行なっていることに着目し、教育学部国際交流委員会は、大学間協定校や部局間協定校およびその附属学校、協定校さらに在外日本人学校でのインターンシップを企画した。

本稿は、平成25年度から平成28年度の間在外日本人学校および海外協定校での教育実践に関する報告と今後に向けた方向性の検討を纏めたものである。

この教育実践には、次の5つの大学間、学部間協定校が中心的役割を果たしている。

- 1) インドネシア教育大学
(2006年学部間協定、2010年大学間協定締結)
- 2) 台北教育大学
(2000年学部間協定、2006年大学間協定締結)
- 3) 釜山大学
(2006年学部間協定、2016年大学間協定締結)
- 4) ミズーリ州立大学 (2015年学部間協定締結)
- 5) モアヘッド州立大学 (2016年学部間協定締結)

学生は、上記5校およびその附属学校、協力校、さらに同じ地域にある在外日本人学校において教育実践を行った。学生には、帰国後、「教育実践インターンシップ」の単位が付与された。特に、在外日本人学校における実践は、平成26年9月、群馬大学教育学部が全国の国公私立大学の中で、初めて日本人学校で行ったインターンシップとしての特長を持つ。

学生参加への経済的支援（奨励金）としては、日本学生支援機構JASSOからの支援および群馬大学海外派遣支援事業奨励金（群馬大学学長裁量経費）から支援を受けた。JASSO協定派遣として特に、平成25年度留学生交流支援制度（協定派遣）（短期研修・研究型）に採択された【群馬大学・インドネシア教育大学『Lesson Study』プログラム】、平成27、28年度海外留

学支援制度（協定派遣）に採択された【東アジアにおける教育大学短期研修プログラム】および【群馬大学教職志望学生のためのアメリカ合衆国短期インターンシッププログラム】を明記しておく。

以下、5つの協定校およびその附属校、協力校、日本人学校における研修及び実践を記述する。

2. インドネシア教育大学およびバンドン日本人学校

インドネシア教育大学およびバンドン日本人学校は、インドネシアの首都ジャカルタから約200km東に位置するバンドン市にある。バンドン市は、1955年、第一回アジア・アフリカ会議が開催された都市として知られている。バンドン市は、標高800mを超えるためインドネシアという熱帯地域でありながら平均気温が年間を通して25℃～30℃と過ごしやすい。

インドネシア教育大学、バンドン日本人学校における短期研修およびインターンシップは、平成25年度から平成28年度まで次の(a)～(d)の延べ4回行われた。

- (a) 平成25年9月17日～25日 [合計8名]
(修士2年生3名 修士1年生3名 4年生2名)
- (b) 平成26年9月15日～26日 [合計2名]
(修士2年生1名 4年生1名)
- (c) 平成28年1月11日～22日 [合計2名]
(修士1年生1名 4年生1名)
- (d) 平成29年1月16日～27日 [合計3名]
(修士2年生2名 4年生1名)

(a)と(d)は、主としてインドネシア教育大学及びその附属学校また協定校でのインターンシップが中心となった。(b)と(c)は、日本人学校でのインターンシップが主体となった。

(1) インドネシア教育大学
(Univertitas Pendidikan Indonesia以下UPIと記載)

まず、(a)平成25年度の研修プログラムを記載する。

9月17日（火）

午前：Opening Ceremony

UPI学長 Prof. Sunaryo Kartadinata 講話

午後：中学校 SMP 29 における授業参観

9月18日（水）

午前：小学校 SD GAGAS CERIA において授業参観

午後：UPIにおいてLesson Studyに関する討論会

9月19日（木）

午前：UPIにおいてProf. Didi Suryadi による講義
『Current Trends in Educational Research in
Indonesia : Didactical Research Design』

午後：小学校 SD GAGAS CERIAでの授業研究会

9月20日（金）

午前：小学校 SLTPN 12 において授業参観（図1）



図1. バンドン市現地小学校

午後：Saung Angklung Udjo 世界無形文化遺産鑑賞

9月23日（月）

午前：高等学校 SMP 1 Lembang において授業参観

午後：UPIにおいてProf. Turmudi Ahmadhusainによる
講義

9月24日（火）

午前：発表準備

午後：群馬大学学生による研修発表会

UPI日本語学科の学生との交流会

9月25日（水）

午前：バンドン日本人学校における授業参観

午後：Closing Ceremony

学部長 Prof. Asep Kadarohmanによる講話

現地校で授業参観を行う場合には、インドネシア教育大学の日本語専攻生もしくは英語専攻生をバディーとし、インドネシア語での授業に関し理解が進められるように工夫した。

最終日には、学生がインドネシア教育大学の教員に向けて、研修発表会を行った。研修の報告、日本とインドネシアにおける教育の差異、指導法の違い、今後活かしていきたい方向性に関し、英語で発表を行った。

(d) 平成28年度においても、インドネシア教育大学および附属校等で授業参観および授業研究会に参加

し、最終日には、やはり英語による発表会を行った。平成28年度の特徴としては、各自の卒業論文や修士論文の内容も合わせて発表した。いずれもインドネシア教育大学の教員から高い評価を得た。

参加した学生の多くが指摘するように、バンドンで参観した小学校、中学校では児童、生徒が目を輝かせて授業に参加していることに驚いたという感想が多かった。インドネシアでは、小学校の義務教育の開始が1983年、中学校の義務化が1994年であり、十数年前までは、成人の8割が義務教育未修了といわれていた。しかし、21世紀に入ってからの経済成長とともに就学率も向上している。日本では、教育を受けられることが当たり前であるが、教育を受けられることの喜びが、インドネシアの児童生徒の日々の学習態度に反映していると、指摘した学生もいた。

(2) バンドン日本人学校

(b) 平成26年度と(c) 27年度は、バンドン日本人学校での研修が中心となった。バンドン日本人学校は、昭和52年に補習授業校として始まり、昭和59年に日本人学校として認可された。バンドン日本人学校は、小規模校である。平成26、27年度の児童生徒数（小中学校生）は、それぞれ16名、13名であった。教員数も9名（校長、教頭、インドネシア語教員も含む）で、いくつかの授業は、複式で行われている。それでも教員数は足りなく、校長先生も週に7コマの授業をしているとのことである。

平成26年度のインターンシップは、小学校1-2年生と中学校1-2年生、平成27年度は、小学5年生と中学校2年生のクラスに配属された。主に学生の専門の算数と数学の授業を担当したが、それ以外にも、道



図2. バンドン日本人学校協定校との交流会

徳、水泳、英会話の授業にも参加した。また、市内のスティアブディ校（現地校）との交流会（図2）にも参加した。

日本人学校の教員にとってもインターン生を受け入れることは、よい刺激になると評価をいただいた。

平成29年1月にはお世話になるだけでなく、こちらから提供できることとして、大学教員が、バンドン日本人学校で中学校3年生に向けて数学の授業を行った。父兄やバンドン日本人学校の先生方にも参観していただいた。（伊藤）

3. 台北日本人学校および台北教育大学

台北日本人学校は台北市の中心から北におよそ10キロの天母地区にある。日本人学校の周囲は台北でも指折りの高級住宅街であり、道路を挟んだ向かいにはアメリカンスクールがあり、文教地区のような性格ももっている。

日本人学校は小学部と中学部が一つの敷地内であり、現在の生徒数は合わせて750人ほどである。日台関係の深化と台湾経済の成長にともなって日本企業の駐在員をはじめとして多くの日本人が台北で生活するようになり、そうした人たちの子弟の教育の受け皿として日本人学校も発展を続け、現在では海外の日本人学校としても有数の規模となっている（図3、4）。

2014年以来、台北日本人学校のご厚意で各回2名ずつ、群馬大学教育学部の学生をインターンシップ生として受け入れていただいている。2週間というわずかな期間ではあるが、実際に授業をやらせていただいたり、児童・生徒と学校での1日の活動を共有したりするなかで参加学生たちは密度の濃い体験ができたのではないかと考えている。具体的に学生たちひとりひとりが感じたことはさまざまであろうが、一般的にいえ



図3. 台北での日本人学校正式名

ば群馬県内での教育実習とは違った体験ができたという意味で、以下のような意義があったのではないかと考えている。

第一はいうまでもなく、海外の日本人学校で子どもたちがどのような教育を受けているのかということを通じて直接見聞できることである。基本的には日本の学習指導要領に沿った教育が行われているとはいうものの、中国語の授業があること、各教室に電子黒板が備えられていること、近隣の小中学校との交流会や市内各施設の見学など行事が多いこと、いわゆる部活動の運営は教員ではなく生徒の親御さんが担っていること、こどもの教育について関心の高い家庭が多い一方で帰国後の進路について不安に思っている家庭もまた少なくないこと、など日本国内の小中学校とは学校の環境がかなり異なっている。そうしたなかで生徒のようすを観察しながらどのような授業をどういうかたちで進めればよいか、群馬県内での実習とはまた違った試行錯誤が求められる。

第二は、日本人学校に勤務する諸先生方との交流ができるということである。日本人学校に勤務するスタッフは日本国内での選考を経て台北をはじめ世界各地の日本人学校へ派遣される教員と、台北日本人学校が現地で募集採用した教員スタッフがいるが、その出身地・出身県は多様である。日本国内から派遣される教員は当然ながら海外の日本人学校で教えてみたいという希望をもってやってきているので、海外への関心・国際的な視野は自ずと高い一方で、その教育経験から出身県の事情にも詳しい。こうした先生方との接触は学生たちにとっては群馬県内での実習経験を相対化するきっかけとなるという意味で大変貴重である。また、現地採用のスタッフの方には台湾の方も多い。学校の運営は日本人だけで行われているわけではなく、スタッフレベルでも、地域社会との関係においても、また行政との関わりという意味でも、台湾の方の協力がなくてはならないものである。学生たちも学校と社会との関係について改めて考える機会となったのではないかと。

第三は、「外国でくらす」ということそのものが大きな意義をもつということである。台湾は日本からも地理的に近く、日本に対する人々の関心も概して高いことから、海外生活初心者の渡航先としてはまず検討候補となる場所である。とはいえ、言語や気候、自身の



図4. 台北日本人学校正門から校舎を臨む

体調管理といった大きなものからバスの乗り方や食生活、さらには滞在先のユースホステルの環境など比較的小さな問題まで、実際生活していくなかではたくさんのトラブルがあったと思われる。日本人学校での活動・生活以前に、台湾社会における生活に適応していかななくてはならないという点で、学生にとっては群馬県内での実習とはまた違った意味でほどよいプレッシャーであったのではないかと。ただ、こちらとしても事前に台湾の社会、文化、歴史について学習する機会をもう少し学生たちに提供することが求められるかもしれないし、それに基づいた現地の博物館や旧跡などの見学も織り込むことができれば学生たちの台湾社会に対する理解がより深まったかもしれない。今後のインターンシップでは検討したいと考えている。一方で、先述の治安の良さや日本に対する関心の高さが日本人学校の運営上の強みや環境の良さにつながっている部分はあると思われる。台湾社会も台北日本人学校も「海外」の社会・学校の一部ではあるが、台湾のケースが海外の他の場所でもあてはまるわけではないのも確かである。海外であるからといって過度に神経質になる必要はないけれども、多様性に富む世界のなかで、自分たちが台湾で直接体験・経験したことは良くも悪くもそのごく一部に過ぎないということは頭のどこかで自覚しながら今後も視野を広げていってほしいと思う。

なお、インターンシップのなかでは日本人学校での実習の他に、台北教育大学の附属小学校の見学を取り入れた回もあったし、今後は日本語学習を多く取り入れている現地の高等学校への訪問も企画する予定である。(今井)

4. 釜山大学、協力校および釜山日本人学校

釜山日本人学校におけるインターンシップは2015年

度から行われ、2016年度以来、プログラムの充実を一層図るために、釜山大学と釜山恵愛学校（知的障害特別支援学校）への訪問及び交流をプログラムに追加した。2016年度の派遣期間は2017年1月10日～29日で、11日に釜山恵愛学校（午前）と釜山大学（午前）への訪問及び交流、13日に釜山日本人学校の事前指導、16日～26日に釜山日本人学校のインターンシップを実施した。

(1) 釜山大学と釜山恵愛学校

釜山大学（Pusan National University, 1946年設立）は群馬大学と大学間協定、釜山恵愛学校（Pusan Eunae School, 1998年設立）は群馬大学教育学部と部局間協定を締結し、本プログラムを推進するに当たって協力を得ている。

2017年1月11日、本プログラムの参加者（群馬大学生）2名と釜山大学生4名を引率して、釜山恵愛学校を訪問した。釜山恵愛学校では、校長挨拶、学校説明、授業参観、そして施設見学を行った。釜山恵愛学校は教科指導はもちろん、卒業後の進路・職業を念頭にした作業学習（工芸、園芸、美術など）に力を入れており、両大学の学生たちは「卒業後の進路と職業を考慮し、様々な活動を実施していることが印象的だった」「教員も自分の特技や趣味を活かして指導していることがうらやましい。今後、我々もそのような教員生活を送りたい」と報告した。両大学の学生たちは言語の壁はあるものの、日本語、韓国語、そして英語を用いながら、日韓の教育についても議論した。午後は釜山大学へ移動した。釜山大学では、学生交流を主としたプログラムで準備したため、両大学の教員（引率者と釜山大学の交流担当者）は研究室で待っていた。釜山大学の学生たちは、大学広報担当者から大学の概要と



図5. 釜山大学キャンパスにおける学生交流

案内に関する講義を受けて学生交流を準備していたため、キャンパスを案内するに当たって悩んだり、戸惑ったりする様子は見られなかった（図5）。

釜山大学の担当者は、この交流について「釜山大学の学生たちにおいても、国際交流や異文化理解だけでなく、母校（釜山大学）に対する自負心を高めるチャンスにも繋がった」と評価した。釜山大学では、本プログラムによる交流を別の観点で指導に活かしていることが推察される。今後は、本プログラムの参加者にも、同様の観点から群馬大学を紹介できるように指導した上で、海外に派遣する方が望ましいのではないかと考えた。（任）

（2）釜山日本人学校

釜山日本人学校は、日本国文部科学省・外務省及び韓国政府文教部・外務部の認可を得て、釜山日本人会によって設立され1975年10月1日に開校した42年の歴史を持つ学校で、韓国においては韓国教育法に基づく各種学校として位置付けられている。2017年4月1日現在での児童・生徒数は小学部22名、中学部5名の計27名で、教職員は文部科学省派遣教員8名と現地採用の講師および職員、ボランティアにより構成されている。学校の規模が小さいので、複式学級での学習が多いことが特徴で、それを生かした児童・生徒の学びあい・教えあいの機会や個に応じた発展的な学習内容を課すことができているのも、この学校の特筆できる点である。そのためか、こどもたちの学習意欲が常に高く保たれていることが観察できる。

教育課程は、日本国内の学習指導要領に準拠しているが、教科・道徳・特別活動には適宜、現地素材を教材化して取り入れているほか、韓国語及び英語が特設されている。そのほか、キャリア学習・進路指導の充実、体力の向上、道徳の時間の充実、さらには自然体験、社会体験、読書活動等を取り入れ、豊かな情操の育成に努めるとともに、視野の広い児童生徒の育成を図るため、より多くの現地の人々との交流の機会をつくっている。このようなことから、釜山日本人学校でのインターンシップの実施は、「グローバル化に対応できる教員」としての資質を涵養するものとなることが期待できる。

これまでに、2015年度および2016年度の2回にわたりインターンシップを実施してきた。2015年度の実施期間は2016年1月11日～22日で、国語専攻4年生1

名と教育学研究科数学専攻1年生1名が参加し、小学部、中学部にそれぞれ1名配属になった（図6）。



図6. 釜山日本人学校インターンとしての授業

2016年度の実施期間は2017年1月16日～26日で、障害児教育専攻4年生1名と社会科専攻4年生1名が参加し、小学部、中学部にそれぞれ1名配属となった。勤務時間中は単独での授業実施と授業補助、授業参観、清掃指導等に参加することができ、ほとんど常勤の教諭と同じ時間を児童・生徒と過ごすことができた。特に参加者からは、「単独での授業を7時間以上担当させてもらうことができ、良い経験になった。」との報告を受けている。

韓国と日本ではタイムゾーンは同じであるが、釜山の経度は前橋市より約10度西に位置しており40分ほど遅い日の出になる。7:30の出勤では1月ということもあり、まだ暗いうちからの活動となったことも、「海外での生活」を意識するきっかけとなったようである。

（新井）

5. ミズーリ州立大学および附属学校園・公立小学校

群馬大学教育学部は、2015年3月にミズーリ州立大学教育学部との間で締結した国際交流協定に根差し、2015年度から学部生と大学院生の双方を対象とした「教職志望学生のためのアメリカ合衆国短期インターンシッププログラム」を実施している。このプログラムは、教員免許状の取得を目指す学生を対象として、「英語圏での直接体験」を通して教育・文化・社会に関するグローバルな視点を育成し、「英語コミュニケーション能力」を向上させることを趣旨とする独創的なプログラムである。2020年度を皮切りに学校段階ごとに実施が始まる次期学習指導要領が目指す方向性を考

えると、学習者の主体的・対話的で深い学びであるアクティブラーニングが発祥し、長い間伝統的に行われているアメリカ合衆国の教育について体験的に知ることは、大きな意義がある。また、参加者は、日々英語を使って世界中の人々と意思疎通を図ったり、教育に関わる話題を主とした英語研修を受けたりすることで、早期化・教科化される小学校英語に柔軟に対応できる力だけでなく、グローバルなコミュニケーションができる視野を持つことが期待できる。以上から、本プログラムは、優れた教員の資質を育成する上で、非常に意義あるプログラムであると言える。本プログラムは、冒頭でも述べたように、2016年度にJASSOの海外留学支援制度に採択された。

ミズーリ州立大学は、1905年3月に設置された公立（州立）の総合大学で、7学部と7研究科（大学院）と語学研修機関（English Language Institute）から成る。学部には、教育学部、芸術・文学学部、ビジネス学部、健康・人間関係公共業務学部、人文・社会学部、自然科学・応用科学学部、農学部があり、職員は約4,000人、教員は約1,000人、非常勤職員約3,000人で、学生数は約22,400人（学部生約15,200人、院生約7,200人）である。教育学部の附属学校園で伝統校のGreenwood Laboratory Schoolでは、幼小中高の教育を行っており、ミズーリ州立大学の多くの学生がこの附属学校園で教師になるために資質を磨いている。

群馬大学教育学部には12の専攻があるが、ミズーリ州立大学教育学部にはこれらの全てに対応する専攻があることから、本プログラムでは参加者共通のプログラムや活動に加え、各自の専攻のミズーリ州立大学の授業も聴講することができる。2015年度と2016年度のプログラム参加者は、表1のとおりである。

表1. ミズーリ州立大学プログラム参加者

年度	学部生	大学院生	合計
2015	数学 2名	数学 2名	11名
	英語 6名	英語 1名	
	計 8名	計 3名	
2016	国語 2名	数学 2名	6名
		英語 1名	
		保健体育1名	
	計 2名	計 4名	

本プログラムは21日間で実施し、主な活動は以下のとおりである。

a. 附属語学研修機関（ELI）における英語研修

- b. 教育学部附属学校園（Greenwood Laboratory School）における幼小中高の授業参観
- c. 地元公立小学校（Bingham Elementary School）における授業見学と児童への日本文化紹介・交流
- d. ミズーリ州立大学における専攻関連授業の聴講
- e. ミズーリ州立大学長等への表敬訪問（図7）
- f. ミズーリ州大学日本語授業の補助・学生との交流
- g. ミズーリ州立大学教員・学生、社会人との交流
- h. 学生寮におけるアメリカ人学生および留学生との生活と交流
- i. 現地学生との大学チームスポーツ試合の観戦等
- j. ミズーリ州立大学スポーツジムでのワークアウト、図書館・教材図書館・学生会館等施設の活用
- k. アメリカ文化理解・体験活動（美術館等）



図7. ミズーリ州立大学長Dr. Smartを表敬訪問

先に挙げたうち、本プログラムの核となる活動はaの英語研修とbの附属学校園における授業観察である。主として、平日は、午前にはa英語研修、午後にはb附属学校園での授業観察を行い、その後様々な活動を行う。また、週末や祝日にも交流や異文化体験などを行う。

まず、aは日本語では「英語研修」と記しているが、英語ではIntegrated English Skills for Education Majorという名称で、教育学を専攻する学生のための内容を統合した英語力育成プログラムである。両大学の担当者は、本インターンシップの各活動が有意義なものとなるよう、事前に参加者の専攻、英語力を始め詳細な情報を共有して意思疎通を図りながら、それぞれの内容の綿密な計画を立てる。インターンシップ開始後には、こうした計画がより効果的に実施されるよう、双方の担当者で調整を行っていく。特に、ミズー

り州立大学側の担当者は5名ほどの教員チームから成るため、全員の意見や考えが有効に反映できるような取組をし、群馬大学側の担当者と思疎通を図る。これらの方針から、初回であった2015年度の英語研修の内容を一層充実させ、2016年度の参加者は、“Warm-up Activity, Motivation Enhancement, Mindset, Project-Based Learning”という学習指導の一連の要や特別支援教育などについてアクティブラーニング形式で日々学び、最後にそれぞれが独自に設定したテーマで、スライドを用いたプレゼンテーションを行った。これらは、参加者全員が帰国後の本学における報告会でも発表を行った。専攻に関わらず、英語で学び、考え、自分のテーマを追求してまとめ、発表を行う経験は意義が大きいと、全員が述べている。bの授業参観では毎日2～3の専攻に関連した授業やその他の興味ある授業を参観し、参観後には担当教師と話し、質問することもできる。参観の場を提供する教育学部附属学校園のGreenwood Laboratory Schoolでは、幼小中高の授業参観ができるため、子どもたちの発達段階に応じた様々な授業の展開を学ぶ。授業参観は、参観者を意識させずに観察できる隣接したマジックミラー張りの部屋からや、子どもたちとインタラクティブを図りながら観察できる教室の双方で行うことができる。cの地元小学校Bingham Elementary Schoolでは、日本文化を紹介し、児童と交流する。例えば、2015年度には、体育館で全校の児童300名ほどに、書道、柔道、アニメ、折り紙や新聞紙を用いた兜づくりなどを中心に日本文化の紹介し、子どもたちや教員と交流した。参加者は、プログラム修了時(図8)まで非常に多くの人々との交流と異文化体験の機会に恵まれる。異文化体験プログラムでは、美術館や名所散策等に加え、



図8. プログラム修了証を手に担当教師の内3名と

図8で着ている絞り染めシャツ作り等も体験する。

宿泊先には、参加者それぞれがアメリカ人学生と留学生と一緒に日々の生活ができるよう、4ベッドルームのスイートルーム形式の大学寮が提供されており、ここでも非常に貴重な体験ができたこと、全員が述べている。

実施後にミズーリ州立大学と群馬大学の双方で行ったアンケート調査では、全員が本プログラムは様々な点において「非常に有意義であった」と評価している。

最後に、2年間の参加者(Participants、以下Pとする)から寄せられた感想の一部を紹介したい。

P1: 事前に高校数学のミズーリ学習規準を学び興味をもって研修を行った。アメリカの授業は復習に時間をかけ、体系的なカリキュラムが組まれていた。授業構想の新たな視点を見出せた。ICT教育も充実していた。

P2: アメリカの教育を学びながら日本の教育と比較でき、日本の教育の優れた点と改善点を考えられた。

P3: 英語を使いながら学び、英語で教育について学ぶだけでなく、多くの人々と交流ができ、感動した。

P4: 計4つのカフェテリアで3食自由に食事ができ、そこで授業外でも非常に多くの学生と交流ができた。

P5: この充実した研修での生きた経験を自分の生徒たちに話すことで、子どもたちの世界を広げ、世界に目を向ける子どもたちを育てることができると思う。

P6: アメリカの教育センターのプログラム構成のため、新鮮で役立つことが多く、日本の現場でも活用できる。

P7: 日本にない授業のスタイルやICTの活用が学べた。

P8: 平日の午前は教育について学び、午後は授業参観、放課後は交流を行えただけでなく、週末にも文化体験活動などを組んでいただき、非常に充実していた。

P9: アメリカ人学生と留学生のルームメイトがいる環境で3週間生活し、教育学部生のための充実した英語研修を受け、多くの授業参観や交流ができ素晴らしい。(上原)

6. モアヘッド州立大学および地域の実習校

Morehead State University (以下MSUと記載)は、アメリカ、ケンタッキー州のモアヘッドという小さな田舎町に位置する。当該校は担当である菅生の母校であり、小規模ながら安全で熱心な気風であることが再確認できたので、学生交流に適した北米の大学として平成27年度に協定が締結された。この度、第1回目の



図9. キャンパスは欧風

短期教育体験インターンシップ（23日間）に、教育学部生2名（音楽3年、理科2年）が参加した。

（1）3つの側面が特徴のプログラム

本プログラムの最大の特徴は、大学の授業聴講、公立学校視察、語学研修という3つの側面を備えている点である。予め学生自身の専門分野と興味ある学齢を伝えてあり、学生2名はそれぞれ音楽と理科を中心に聴講や公立学校視察を行なった。

MSU授業への参加は週1-2日で、理科専攻の学生はScience ClassをMSU学生と共に聴講した。音楽専攻の学生は、声楽の個人レッスン受講、サクソフォーンで吹奏楽に参加したほか、音楽教育の講義を聴講した。

地域の実習校である小中学校へは週3日（8-14時）出向き、音楽学生は、中学校の合唱および吹奏楽の授業を視察したほか、週に1日は小学校も訪問した。理科学生は、小学校志望だったため、3年生学級に配属され、様々な教科を観察したほか、持参した「使い捨てカイロ」の仕組みを説明するなど、日本特有の事例を小学生に提示する時間も設けてもらった。また、MSUからの教育実習学生が行なう授業もあった。地域にはCave Run Lakeという観光名所のダム湖があるが、粘土や石、木材で「ダムを作る」という体験的な活動を通して、洪水等の自然災害について学んでいた（図10）。

また、最終週には、別の小学校にて「日本について」のプレゼンテーションを行なった。

語学研修の部分は、公立学校の視察後にキャンパスに戻り、午後2時間程度、週4日行なわれた。内容は英語科教授陣2名による会話中心のもので、英語専攻

の大学院生も時折加わり、その日の出来事や、日本とアメリカの文化の違い等を説明しあうものであった。日本の中学や高校の「学校制服」や「クラブ活動」等のテーマが宿題で与えられ、学生たちは身振り手振りを交え話していた。説明の最中には辞書の使用は不可で、うまく説明できない場合は、言葉や文章を変える必要があり、難易度の高い課題だったようである。文法的に正しい英語を「型」で学ぶというよりは、いかに内容を伝えるかという「コミュニケーション」の真の姿に近づいたセッションであったと捉えられる。

（2）ホームステイでアメリカのリアルライフを体験
宿泊はホームステイで、2組のホストファミリーには大学までの送迎、週末の活動など大変お世話になった。先方も留学生受入による交流を楽しみにしておられ、手作りのお弁当を持たせて下さり、また体調不良の際には仕事中でも実習校に迎えに来てくださり、医療機関の受診や看病等、本当の家族のようにお世話をしてくださった。週末は小学生・高校生の子供とともにショッピングや観光に出かけたり、親族パーティに参加したりして、学生はアメリカンライフの一端を経験したようである。この点は他の教育学部のプログラムと異なり、本プログラムの特色ともいえよう。



図10. 「ダムを作る」活動の様子

（3）その他

このほか、学生は国際交流課主催のレクチャーや交流会、キャンパスでのイベント（コンサート、スポーツ試合観戦等）、に参加したり、空き時間には、ウェルネスセンターの利用、研修室での自習、MSU学生（理科学生やメンター学生）との食事、等キャンパスライフを味わったりする機会があった。

引率した菅生は、実習校の視察訪問や担当者との打

ち合わせ、ホストファミリーとの連絡のほかMSU音楽科におけるゲスト・アーティスト・リサイタル、マスタークラス（公開レッスン）等の研究交流を行なった。リサイタルには参加学生もホストファミリーとともに出席し、協定校との交流らしい一面を提示することができ、有意義であったと考える。

（4）まとめと今後の課題

3つの側面（大学の授業聴講、公立学校視察、語学研修）を持つプログラムとして、独特な実践であり、特に生活全てに英語を用いている点においても意義があった。MSU側からも、学生の専攻や興味にあわせて受入学科や観察授業を用意していただくなど、細やかな配慮があり、学生がプログラムに満足して帰国することを一番に望んでいると大変協力的であった。つまり、プログラムを通して何を学び、体験したいか、という目的意識とイメージをしっかりとって参加することにより、臨機応変に交渉や対応が可能なのである。公立学校の現場には、日本の教育実習とほぼ同様の形で入ることも可能なので、今後は本実習を終えた3、4年生、また大学院生の参加が増えるとより一層、充実した成果が期待できる。

また、今回3週間のホームステイを経験したことは、参加学生にとって第2の家族ができたような、かけがえのない体験であったと考える。平成29年4月に行なわれた留学成果発表会や、第2回短期インターンシップの募集説明会での発表においても、実感のこもった体験報告がなされ、英語専攻以外の学生も勇気を出して飛び出してみることが大切と力強く発信していた。

今後の検討事項としては、実施時期（2月は降雪時期で小中学校が休校となる場合も多い、また、群馬大学内で海外研修プログラムが同時期に多い）や、宿泊形式（寮生活などの現地学生さながらの生活体験を希望する場合）、等が上げられる。またプログラム全体の組み方（第1週は時差ボケなど体調管理との調整）についても、検討していきたい。（菅生）

7. おわりに

平成24年8月の中教審答申（第82回総会）に以下の記述がある。『（以下抜粋）グローバル化に対応した人

材育成が求められる中、教員自身もグローバルなもの見方や考え方などを身に付ける必要がある。このため、例えば教職課程を置く大学において、教職課程の質の維持・向上を図りつつ、要件を満たせば学生が海外に留学した際に取得した単位を教職課程に係る単位として認めていくことなどにより、教員を志望する学生の海外留学を促進していく必要がある。』

群馬大学教育学部はグローバル化を進めるべく平成28年度、新たにハノイ教育大学と学部間協定を締結した。さらに、ハノイ日本人学校での海外インターンシップも開始する。また、韓国の5つの特別支援学校、釜山日本人学校と包括連携協定の締結を進めている。

ここでやっている海外研修及びインターンシップは、各学校との調整、参加募集の説明会、面接、選抜、事前指導及び報告会と多くの準備と時間を必要とする。しかしながら、帰国後の報告会で、学生が、その充実感と、教職への益々の意識の高まりを発表しているのを聞くと、継続すべき実践であると強く認識している。

一方、このインターンシップは、在外日本人学校および海外協定校の附属校、協力校の協力がなければ出来ない教育実践である。

最後に、群馬大学学生のインターンシップに対し、日本人学校、協定校附属校及び協力校にご協力いただいていることへ、この場を借りて深く感謝する。今後とも将来教職につく群馬大学の学生がグローバルな視点を獲得できるようご協力いただければ幸いである。

参考資料

1. 群馬大学国際化推進基本計画 平成25年10月
<http://133.8.133.35/data/images/aboutus/kokusaikihon.pdf>
2. 教育学部における国際交流 平成26年3月
ケヤキ通信 4号
http://www.edu.gunma-u.ac.jp/jp/keyaki/keyaki_news_vol4.pdf
3. 教育学部における国際交流 平成28年2月
ケヤキ通信 6号
http://www.edu.gunma-u.ac.jp/jp/keyaki/keyaki_news_vol6.pdf
4. 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申） 平成24年8月
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf

（いとう たかし・いまい なるみ・あらい よしひろ・いむ よんじえ・うえはら けいこ・すごう ちほ）